

Weekly Bulletin 2019-2020



RI会長

マーク・ダニエル・マローニー



ロータリーは
世界をつなぐ

静岡東ロータリークラブ

会長／新聞桂子 幹事／森下登志美

事務局／静岡市葵区追手町2-12 静岡安藤ハザビル5F TEL054-254-5611

例会場／ホテルアソシア静岡 例会日／毎週 木曜日 12:30~13:30

<http://www.shizuoka-east-rc.jp>



会長

新聞桂子

第 2932 回例会

(夜間例会)

令和 2 年 1 月 9 日 天候 晴

《司 会》 森下 登志美 君

《合 唱》 「君が代」
「奉仕の理想」

《BGM》 スッペ
喜歌劇「軽騎兵」序曲
オッフェンバック
喜歌劇「天国と地獄」他

《ゲスト》 なし

《ビジター》 なし

《本日のお祝い》

お誕生日
該当者なし

結婚記念日
該当者なし

《ソングリーダー》

今年は子年、庚子（かのえね）
というそうです。60年に一度の庚子
という年は「新たな息吹と繁栄
の始まり」つまりは、新しいこと
を始めると上手くいく、大吉の年
であるようです。今年は本当に良
い年のようなので、良いソングが
始められると思います。

鍋田 知佐人 君



《歳男スピーチ》

伊藤 洋一郎 君

子供のころ、「何年(なにどし)?」、「干支は何?」と聞かれ
るのがあまり好きではありませんでした。早生まれの私は、前
の年に生まれた、いのしし年の多くの同級生に「お前は、ねず
み年のチビ」と言われるのが嫌だったのです。それは今も変わ
っていません。

「干支は何?」という問いかけには、世間一般の時間軸の考
え方が基本にあるように思います。

干支を意識するように、世間一般の時間軸というか、世間の

決めた時間の流れのルールに縛られてしまうと、なんだか自分
らしくないというか、自分の人生を生きている感じがしないよ
うな気がします。世間一般の時間軸は、自分の決めたものでは
ないから、自分の生き方としては、目の前の人生を好きな方向
に一歩ずつ歩いていきたいと思っています。

人の人生というのは100年ある
のか、80年あるのかはわかりませ
んが、終わりを意識しては今
の自分の人生を生きていけないよ
うな気がするのです。

私には一生のうちに体験してみ
たいことが3つあります。1つ
目は、アルゼンチンに行って、夜
更けて石畳の上で老夫婦が踊るタ
ンゴを見てみたいということ。2つ目は、ポルトガルに行って
暗い酒場で年老いた女性がファドを歌うのを聞いてみたいとい
うこと。3つ目は、イタリアのシチリア島で真夏の日差しを
浴びてギンギンに冷えたレモンチェロを飲んでみたいとい
うことです。大学生の頃からずっと思っていたことですが、まだ
どれも実現できていません。



この3つのシーンをよく想うのは、こういうシーンの中に自
分がいると、時間を忘れて、人の営みや生きている喜びや悲し
さを実感できるのではないかと思っているからです。

年男として、12年を1つのサイクルと考えると、人という
のはやはり旅をしているのではないかと思います。

JR東海の青春18きっぷのポスターに、山間の風景を背景に
して「14時55分 一生来なかったかもしれない場所に私は今
来ています」というキャッチコピーが書かれているのを見たこ
とがあります。そこに自分がいることを不思議に思うくらいの
場所に立ってみたいと思っています。同じような視点で、城山
三郎が晩年のエッセイで「そこに行かなくては見えないものが
あります」と書いています。まだ行かなければならない場所、
行って見なければならぬものがあるのではないかと考えて
います。

新しく、ねずみ年を迎えて想うことは、これからも、そこ
に行って見て、初めて見えるものに出会ってみたい。また、来る
はずのない場所に、思いがけず立ってみたい。そういう機会を
持ちたいと思っています。そして、これから旅した場所、立ち

止まった場所にもそれぞれの暮らしや人生があるのだと実感してみたいと思います。

いずれにしても、ねずみ年のチビの私としては、これからも、次のねずみ年まで頑張って旅していきたくと思っています。強いメンタルをもって…。

ジャパンラグビーのヘッドコーチであったジェイミー・ジョセフ氏が、ジャパンが4連勝した直後のインタビューで記者から「ジャパンのメンタルの強化はどうして出来たのか」と問われて、次のように答えています。「選手には、朝起きてラグーマンであることを想う前に、いい男になろうと思えと求めた」と。いい男になるという思いは、激しいラックの中に躊躇わずに入っていける勇気に代わっていくのだろうと思います。

次のねずみ年までに、私はどこを旅して、どこにいるのかはわかりませんが、せめて、これから毎朝、いい男になろうと思って起きてみようと思います。

《歳女スピーチ》

近江 陽子 君

皆様、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。私が、年女ということで思い浮かぶことを述べさせていただきます。



私も3月の早生まれということ、同級生のほとんどがいのしし年でした。最大で1年くらい歳が違う方たちと学年を過ごさなければならなかったのも、何をすることも遅いという状態で、子供の頃は発達が遅いのではないかと悩み、辛い思いをしました。今になっては遠い記憶で、1年くらい大したことはなかったと思っています。

幼少期、年男、年女という言葉で思い浮かんでくるものと言えば、12年ごとに巡ってくるもので節分の時に豆まきをさせてもらえる人ということでした。最初の自分の干支が巡ってくる前というのは、早く来ないかと待ち遠しくて仕方なかったことを覚えています。

そして、今年、4回目の年女ということで思い返しますと、良くしたものでそれぞれの時に何か節目になるようなことが自分の身に起こっていた気がします。

12歳の時は、とにかく年女ということがうれしくて仕方なかったのですが、それと同時に次の干支が巡ってきたときには自分はどうなっているのだろうと考え、初めて「何のために生きているのか。自分は何をなすべきなのか」ということを子供ながらに漠然と考えるようになりました。子供心にすごく不安にも思ったことを覚えています。

そして、高校、大学と勉強を重ねた後、24歳の時、入会の際の卓話でもお話ししましたが、最初に志した外国語であるスペイン語で身を立てるという方向性から大きく舵を切り、大学を卒業後、もう一度法学部へ進学し法律の世界に足を踏み入れました。

その後、紆余曲折を経て司法書士資格を取るに至り、市内の司法書士事務所では修業の後、36歳の時に同じ事務所でも司法書士登録をさせて戴き、本格的に司法書士としての仕事を始めました。この間に大村さんとの出会いもあり、今に至るまで本当にお世話になっています。

そして40歳の時に独立開業して自分の看板を掲げるようになり、その後、同業者と事務所を統合して仕事をするようにな

りましたが、昨年、再び個人事務所を開業しました。

この半年はその作業でずっとバタバタしておりましたが、年が明けてようやく仕事に専念できる状態が整いつつあります。先ほどの鍋田さんのお話にありましたが、今年は新しいことを始めるにはとても良い年ということなので、48歳の節目の年に新たなスタートを切ることが出来たのは非常に良いめぐりあわせだなと感慨深く思っております。

次の年女まで12年ありますが、仕事もやれることを精一杯頑張りたいと思います。また、伊藤先生のお話を伺って、行ったことがないところに行って、そこで何かを感じてみるのもいいなと思いました。スペイン語を勉強していたのに、残念ながらスペイン語圏の国に行ったことがないので、スペインをはじめとした中南米の国や、滅多に行く機会のないアイスランドに行って大地の裂け目を見てみたいと思うようになりました。

《相原副会長乾杯のご挨拶他》



《スマイル報告》

- 高田 雅司 君 新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。令和2年が皆様にとっても、私にとっても良い年でありますように。
- 伊藤 洋一郎君 年男の卓話をさせていただきました。
- 宇田川 享 君 昨年末に年末家族会を無事開催することができました。担当者の皆様、出席者の皆様に感謝してスマイルします。
- 望月 康弘 君 誕生日のお祝いを前倒ししていただき、ありがとうございました。今年は誕生日に伊勢神宮に初詣をしました。
- 加藤 力弥 君 昨年12月の結婚記念日にピンクのシクラメンをありがとうございました。花言葉のとおり「憧れ」られる人間を目指してまいります。決意と感謝のスマイルです。
- 川崎 依子 君 年末家族会は親睦グループのすばらしい企画で楽しく過ごすことができ、ありがとうございました。また、本日はお誕生日のお祝いもいただき感謝してスマイルします。

(会報作成 加藤 力弥)